

巻 頭 言

広く深い教養を「基礎」とした学生を育てる教員養成

学園を彩るサクラ吹雪も過ぎ、オオムラサキツツジやアジサイの緑が次第に目に映える頃となりました。この一年の中で最もすがすがしい季節を迎えている時、今年も、「学苑」初等教育学科紀要をお手元に届けることとなりました。

本学の初等教育学科は、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭を養成しています。現在、保育士・教師には「保育・教育などの実践的指導力」、「しつけや規律などの生活的指導力」、「自ら企画し運営するなど組織的に働ける能力」「家庭や地域と連携出来る資質・能力」などが求められています。

これらの資質能力の大切さは勿論ですが、その基盤となる学問や研究の基礎的な力が大学生活の中で、どれほど学生に身に付いているかが問われています。

この基礎的な力は「教養」という言葉で表されます。この教養は、人と出会ったり、書物を読んだり、多様な経験をしたりすることから身に付いていくと言えます。この「教養」の行き着くところは、自分とは違った考え方がある、自分とは異なる行動の仕方がある、つまり、自分とは違う人間がいて、それぞれの生き方があるということの自覚に他なりません。

その意味において、大学の教員養成の場で、学生に幅広く深い「教養」を身に付けさせることは急務です。なぜならば、保育士・教師の仕事は子どもだけではなく、保護者や地域社会に対する深い理解がなければ存在しません。つまり、教師である以前に豊かな社会人であることが求められる訳です。保育士・教師が社会の「カオス」の中で生き、「複数解」の中で、自己形成をしていくこととなるからです。

初等教育学科の教員の専門領域は多彩であります。教育学、哲学、専門科学、教授・学習学、心理学等の多様な研究者がおり、まさに学際的様相を示しています。その意味では、本学科は、他学科と異なる趣を持っていると言えます。

私は、この学際的様相の本学科の中で、教員養成を進めることに大きな特色があると捉えています。かねてから議論されてきた「閉鎖性」から「開放性」の教員養成であります。本学全体が「学部共通科目」の開講や、「女性教養講座」「文化研究講座」「実践倫理」などを実施し、横断的な講座を重視している点は、まさにその方向軸を如実に示すものです。

社会の大きな変化の中で生きる学生、そして私たち教員にとっても、3.11以降、求められているのは、生き残った自分、生かされている自分自身への深い眼差しであります。言わば、私たちの身代わりとして亡くなって行った方への思いであります。

教員養成がこの深い課題を背負い、子ども自身に本当の意味で「共に生きる力」「一つになって生きる力」が身に付くよう学科全員の教職員が一丸となって社会に通用する教員を育てていく考えです。

本紀要号に掲載された研究論文が、教員養成において、幅広い「教養」を学生自身にもたらし、そして私たち自身にも役立つことを願っています。一読され、各位からお励みやご批正をいただければ幸いです。

(初等教育学科長 小川哲男)